

柏尾谷（兵庫県）

加藤綾音

柏尾谷。私が、川と聞いて真っ先に思い出す名前である。六甲山から流れる小さな川の沢山ある神戸市北区に育ち、小学校の間は野外活動グループに所属していた私にとって、川遊びは、毎夏恒例であった。そんな私が毎年のように遊んだ川、それが柏尾谷である。



神戸電鉄箕谷駅から徒歩 30 分、高速道路や住宅街などの人間の生活するエリアを抜けて、田園の風景がはじまってすぐのところに位置する川で、川上には柏尾谷リバーパークという子供のためのキャンプ場がある。歩いてきて初めに川を目にするのは、大きな道路沿いだ。川はもう山を下りきって平らで幅広な流れである。実は、この川幅の広い箇所は、私が 10 年ほど前に初めて柏尾谷を訪れた時からしばらくは、ごつごつした岩や、草のある自然な様子だったのだが、数年前に工事が始まり、人口整備されて、コンクリートできれいに加工されてしまった。駅から 10 分ほど歩いて来て見つける最初の橋があるところなので、小さいころは必ず立ち止まって橋の下をのぞいたものだった。すると、そこには 10cm くらいの土色をした魚が動いているのが見えた。目を凝らさないと見えなくて、魚が動くときまるで地面が生きていたかのように見える。しかし、コンクリート整備されてからは、そのような土色はなくなってしまったし、魚もいつしか見なくなったような気がする。私が昔に見ていた川の地面はコンクリートの下なのかと思うと、なんだか生きた川を閉じ込めてしまったようで、寂しい。人口整備にも理由があったのかもしれないが、少し離れた町から来ていた私は、その理由を知ることも無くて、ある年に橋の下をのぞいてみたら、いつもの川には出会えなくて代わりにコンクリートを見つけたのだ。疑問だったのは工事をしている間は水はどこをどう流れていたのだろうということ。もしかして、違う水路を通るようになっていたりしたのなら、何年も流れている川を一瞬にして人間が動かしたりするという、なんとも不自然で可愛そうなことが起っていたように思う。

だんだんと住宅街を離れて小高い丘を登っていく道路の坂のふもとの所で、道

路の高架下を覗くようにすると、木々と田んぼの間にも同じ川が流れているのが見える。かなり高い地点から見下ろすので、川は遠くに感じる。道路に立った私たちに一番近いのは、どこからか大量に伸びて来たクズの揺れる葉っぱ。その下に届きそうで届かない木の濃い緑の葉っぱたち。そして、その葉っぱの合間から黒い岩がちらちらと見えて、水が流れ、時に白い泡を立てているのが見える。そこから一段上は田んぼ、棚田のようなもので、丘の傾斜に沿って段がついている。丘の頂上に着くと神社があり、そこからは森が始まっている。大抵、私が野外活動のグループで柏尾谷に行くと言えば、この神社が最初の目標地点だった。神社の入り口には、小さな田んぼがあって、そこでもよく遊んだ。春にはおたまじゃくし、夏にはカエルが沢山いて、捕まえたり出来る。この田んぼは、おそらく柏尾谷の水を利用している。そのことを考えると、手で触れられるその小さな空間は、川が人間と、カエルや他の生き物とに生きるための糧を与えている場面の切抜きのようなのだ。神社の境内に入ると、大きな、大きな木が真直ぐに天に向かって伸びているのに出会う。この木のおかげで、夏に来ても柏尾谷の入り口につくと涼しく感じたのを覚えている。木のすぐとなりは田んぼであるし、あれほど高い木なのだから、根は地中深く遠くまではっいて、柏尾谷川の水を少しずつ吸収しながら育てているのだと思う。大きな目立つ木ばかりではなくて、その木の根元でも私は沢山命に出会った。たとえば、ある時神社の境内の小高くなった少し湿った地面に寝転んで遊んでいると、足がむずむずするので立ち上がってみると、大きなムカデがいたということがあった。木のおかげでできた影と神社の建物や境内にある滑り台の下にはアリジゴクがいる。私はアリジゴクをここ以外のところであまり見かけたことがないので、きっと貴重な生き物に違いないと思う。それから、私の一番のお気に入り、川に沿って山を登っていく道の途中に咲いている小さなスマレの花だ。スマレも、私にとっては山に行かないと見られない貴重な花で、とても小さくて見つけにくいので、見つけると嬉しくなる。私は好きな花は何かと問われればスマレと答える。その時、私の頭の中に浮かんでいるのは大抵、あの柏尾谷に咲いていたスマレだ。どんと川に沿って山道を登ると開けていて川遊びをしやすい所がある。ここでは、大きな岩の上から水が流れてきているところで、天然のウォータースライダーを楽しんだこともあるし、静かな流れの砂地で小魚を必死で捕まえようとしたこともある。リバーパークでは金魚つかみも毎年やっているようだが、わざわざ金魚を放さなくても、よく目を凝らすと地面の砂と同じ色をした小さな魚達が、目の前を泳いでいくのが見える。ただ、彼らはとても素早いので捕まえるの

は難しい。そんな魚と戯れた思い出も含めて私はこの柏尾谷が大好きだ。

今回、このレポートを書くにあたって、柏尾谷についてインターネットで調べてみると、いくつかのホームページと地図から情報を得ることができた。まず地図と志染川の説明から柏尾谷川といは前述の神社のところをながれている川だが、結果的にこの川は箕谷駅近くの箕谷川と合流し、その箕谷川が志染川と合流するということが分かった。柏尾谷そのものについて書かれているホームページでは、やはりそこを直接訪れた記録を書いたものが多かった。そのようなホームページに乗っていることは、例えば住所と行き方。柏尾谷の住所は神戸市北区山田町原野で、神戸の中心地の三宮から車で20分と表記されていたりした。このように、これは神戸の特徴でもあるが、柏尾谷の自然は人の暮らす地域と近接している。それが故に様々な人が川を訪れることができるのだ。インターネット上の記録も、リバーパークのように子どもたちとハイキングに来た人の記録もあれば、沢登りなどをして柏尾谷に下って来たなどという、山歩きに熟練下人の記録もある。また、歴史について調べてみると、江戸時代から明治時代にこの川の流域で育てていた綿の干天による凶作が続き、農民達は飢え苦しんでいたという話を見つけた。そして、その村の存亡をかけた重要課題が、そこを流れる川から山田疎水という疎水（山田川も志染川と繋がっている）を引くことだったのだそうである。そして、農民達が疎水計画を進め、台地への導水が可能になったため、田畑が潤ったというのだ。今でも、歩いていて目にすることのできる青々とした田んぼはこのような疎水のおかげなのかもしれない。そう考えるとさらに川と人間生活に深い関わりを感じた。

この川には週末の人が多いたまに來ることが多かったが、静かな日に、高校の先輩と二人で來たこともあった。ちょうど、自然を題材にした映画を撮ろうかと話している時で、柏尾谷の自然を背景にできないかと考えていたのだ。静かな森を先輩と二人で歩いて、観察してみると、いつもに増して川が美しく見えた。もしかすると、そのざわめきの無い姿こそ、川の本来の姿だったのかもしれない。水は澄んでいて、静けさの中には水の音をはじめとする自然の音が聞こえてきたのを覚えている。その時、川はそういう瞬間に人間以外の生き物と触れ合っているように思った。私は、人がいる川も決して悪いと思わない。それは人間と川が触れ合っている瞬間だからだ。しかし、私は柏尾谷川のような川は人が帰った後に、また静けさを取り戻し、水の透明さを取り戻し、他の命と触れ合える川であって欲しいと思う。そして、川と人間とその他の命とが協力して共存できることを願いたい。

参考資料

柏尾谷 <http://www.asahi-net.or.jp/~mr8t-myk/rokkou/kasio.html>

(2008年1月11日)

柏尾谷リバーパーク <http://www.h7.dion.ne.jp/~keiryu/index.html>

(2008年1月11日)

志染川 <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BF%97%E6%9F%93%E5%B7%9D>

(2008年1月11日)

淡河川・山田側の歴史 <http://suido-ishizue.jp/kokuei/kinki/hyogo/touban/0104.html>

(2008年1月11日)